

平成20年・第5回企画展

BON
梵

SHO
鐘

BUSEKIAN
—撫石庵コレクション
を中心に—



伝檀原市出土鐘

長徳寺鐘

立正大学博物館
平成20年6月

ごあいさつ

立正大学博物館の貴重な収蔵資料として“撫石庵コレクション”があります。これは、眞鍋孝志氏（元日本古鐘研究会会長）が長年にわたり蒐集されてきたものを、立正大学に寄贈された世界各国の梵鐘を中心としたコレクションです。これまで、『撫石庵コレクション』（立正大学学園 平成12年）『撫石庵コレクションⅡ』（立正大学学園 平成13年）としてその内容報告をしてきましたが、それ以降新たに寄贈された資料があります。

梵鐘コレクションの寄贈は、仏教大学としての立正大学にこそふさわしいものであり、大学博物館として誇るべき資料となっております。「一打聴鐘 当願衆生 脱三界苦 頓証菩提」長く日本人は、心を清める鐘声に救われてきたところでもあります。

今回の企画展では、その新資料を公開するとともに、日本の梵鐘の歴史を、その製作や鋳物師などについて、特に中・近世における関東地方について見ていきたいと思えます。

平成20年6月

館長 池上 悟

目次

ごあいさつ

1. 撫石庵コレクション
2. 梵鐘
3. 梵鐘の制作
4. 中世の鋳物師
5. 近世の鋳物師

凡例

1. 本図録は、平成20（2008）年6月2日（月）～7月5日（土）にかけて開催する第5回企画展「梵鐘－撫石庵コレクションを中心に－」の展示図録として作成した。
2. 本図録の編集・作成は、館長池上悟の指示により内田勇樹（博物館学芸員）が行った。
3. 展示資料・写真については以下の機関・個人に協力を得た。
喜多院（埼玉県川越市）・養寿院（埼玉県川越市）・聖天院（埼玉県日高市）・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館・赤熊浩一氏・和泉屋明江氏
4. 企画展開催にあたって、特に参考にした文献は巻末に一覧として掲載した。

1. 撫石庵コレクション

撫石庵コレクションは、眞鍋孝志氏（元日本古鐘研究会会長）が長年蒐集されてきた梵鐘を中心とするコレクションです。

“撫石庵”とは、眞鍋氏が名付けられたもので、「石」は鐘の別称でもある「青石」からとったもので、「鐘をこよなく愛する庵の主人」という意味が込められています。

撫石庵コレクションは、これまで『撫石庵コレクション』、『撫石庵コレクションⅡ』として報告してきました。日本の梵鐘を始め、中国・朝鮮・タイ・ベトナム・ミャンマーなどの世界各国の鐘があります。また、鐘以外では、鉦鼓・銅鼓・小金銅仏など梵音具を中心としたコレクションになっています。

これらのコレクションは、平成12年・13年に立正大学学園に寄贈されました。平成14年に立正大学博物館が開館するとともに博物館に移管され、主要な資料として展示しています。

今回の企画展では、報告した資料以降に新たに寄贈された資料を紹介します。

眞鍋隆志氏は、昭和5（1930）年1月24日、愛媛県宇摩郡関川町（現四国中央市土居町）で生

誕しました。

昭和38年（株）ビジネス教育出版社を創業し、昭和51年には青燈書房を設立し、ビジネスマン、とくに銀行員の能力開発、教育センター作りに挺身されました。

眞鍋氏は、若いころより何度も手術をされ、昭和29年の暮れ、長期入院の7回目の手術後、NHKの「ゆく年くる年」から、除夜の鐘の音を聞き、郷里の鐘の音をもう一度聞きたい、本物の鐘を撞いてから死にたいと思われ、その後退院されたのち、仕事の合間をみながら鐘と文学の研究をされました。そして、（株）ビジネス教育出版社が軌道に乗り出すと、休暇や出張を利用しながら全国各地の梵鐘を巡り歩きました。

また、梵鐘研究の第一人者である坪井良平氏に私淑し、その後終世の師とされるようになりました。そして、坪井氏の蒐集された梵鐘の実測図と拓本などを収めた『梵鐘実測圖集成』（奈良国立文化財研究所編）を企画・編集され刊行されました。この他にも坪井氏の著作を多く出版し、坪井氏の梵鐘研究を世に広め梵鐘研究の一役を担う仕事をされました。



坪井良平氏



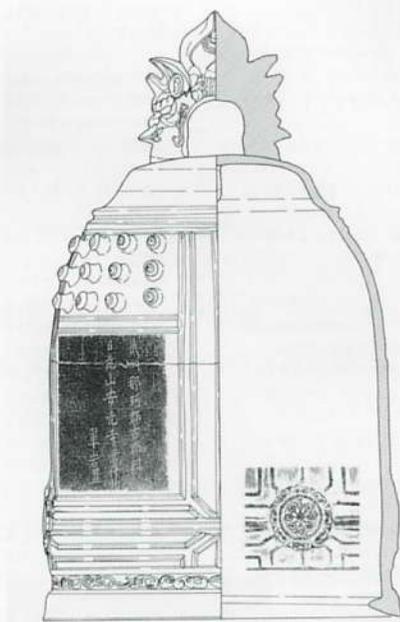
眞鍋孝志氏

撫石庵コレクション新収蔵品

1. 半鐘

大きさ；高さ 52.6cm / 口径 30.8cm / 口唇部厚 3.0cm

年代；寛延元年頃



実測図

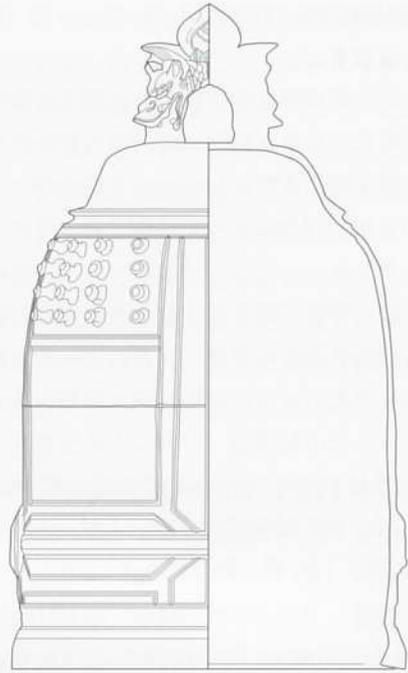


銘文拓本

2. 半鐘

大きさ；高さ 56.4cm / 口径 33.0cm / 口唇部厚さ 2.2cm

年 代；不明

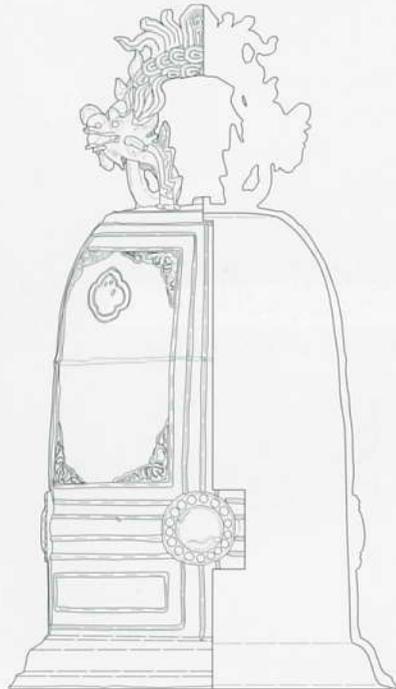


実測図

3. ベトナム鐘

大きさ；高さ 48.3cm / 口径 27.1cm / 口唇部厚さ 1.2cm

年 代；不明



実測図

2. 梵鐘

現在、日本に現存する鐘で最古のものといわれる鐘は、紀年銘をもつものとして、妙心寺鐘（698年）があります。

日本において梵鐘は中世に入ると数多く製作され、江戸時代になると鑄物師の統括も行われ飛躍的に製作数が増えます。しかし、その大半が太平洋戦争の金属回収令によって鑄潰され、その多くが消失しました。

梵鐘とは、寺院で時を知らせたり、儀式の合図のために使われるものです。材質は青銅製（銅と錫をあわせたもの）で、中には鉄・銀製のものもみられます。その起源は、中国に求められます。

梵鐘と呼ばれるものは、1尺8寸（約55cm）以上のもの、または口径2尺3・4寸（約70～73cm）以上、100貫（約375kg）以上の鐘のことを言います。それ以外の1尺7寸（約52cm）以下の鐘を「半鐘」、さらに高さ2尺5寸（約

76cm）の鐘は「喚鐘」と区別されます。

梵鐘の部分は、「鐘身」と「龍頭」に大別されます。「鐘身」には、上から「笠形」「肩」「上帯」「乳の間」「池の間」「中帯」「草の間」「下帯」「駒の爪」に区分されます。それぞれを区分する線は「紐」と呼ばれ、その文様を「袈裟襷」と呼びます。

「龍頭」は正式には「蒲牢」と呼び、2頭の龍を背中合わせに付けたもので、中央部には火焰で包まれた宝珠を配するものが一般的です。鐘を吊り下げるためのものです。

上帯や下帯には文様が装飾され、時代が新しくなると「草の間」にも文様が施されます。

乳の間には、「乳」が施されます。池の間には、銘文が刻まれ鐘の由来や寄進者、鑄物師などの名が見られます。この銘文中に鐘の異称がみられ「洪鐘・堯鐘・青石・鯨鐘・華鐘・鴻鐘・撞鐘」などがあります。



3. 梵鐘の製作

平成 18 年 11 月 17 日、眞鍋孝志氏（元日本古鐘研究会会長）より、伝樞原市出土鐘の復元品を新たに寄贈して頂きました。

伝樞原市出土鐘は、遺存高 46.1cm、口径 30.2cm を測る奈良時代から平安時代前期頃に製作されたと推定される青銅製の梵鐘です。元々藤沢一夫氏（平成 15 年逝去。四天王寺国際仏教大学名誉教授）が古物商から入手されたもので、その後眞鍋氏が譲り受け、立正大学博物館に寄贈して頂いたものです。生前、藤沢氏が「大和で出土したものは大和で展示したい」と話されていたことから、藤沢氏の 3 回忌に間に合うように約 1 年がかりで復元鐘が完成しました。一つは元興寺（奈良県）に、一つは大鐘寺古鐘博物館（中華人民共和国）、一つは千光寺（広島県）、そして立正大学博物館に寄贈されました。

今回、『撫石庵コレクション考古資料図録Ⅱ』（立

正大学学園平成 13（2001）年 2 月）に掲載されている復元実測図を基に、茨城県の鋳物師小田部氏に依頼し復元しました。立正大学博物館に寄贈して頂いた復元鐘は、鋳出した状態のままです。

ここでは、その製作過程を見ていきたいと思えます。梵鐘は、鋳物師と呼ばれる鋳工集団によって作られます。

梵鐘は、外型と中子と呼ばれる型を作りその間に溶かした青銅を流し込んで完成させます。

型は真土で作られ、外型は挽板を回転させて整形されます。外型は分割され鋳込みのときに繋ぎ合わせます。

外型と中子を合わせた後、溶解炉で溶かされた青銅（銅と錫、その他金属の合金）を型に流し込みます。

冷却した後、外型と中子を外し、湯口に残った張りを切り取り磨き上げて完成します。



挽板



鋳型①



鋳型②

※梵鐘制作の写真は、小田部鋳造株式会社にて、平成 18 年立正大学博物館所蔵「伝樞原市出土鐘」を復元する時に撮影したものです。



外型（撞座部分）



外型（龍頭部分）



外型（乳の間～池の間部分）



中子



外型（左）と中子（右）



外型と中子を合わせる



溶解炉から溶かした青銅をトリベに移す



湯入れ



湯入れ



中子を外す



外型を外す



外型・中子を外した所



湯口の張りを取った所



完成した復元鐘

銘文の刻み方

梵鐘に刻まれている銘文は、鐫刻されるものと陽鑄されるものがあります。ほとんどの梵鐘が鑄込み終わった後に、鑿で鐫刻されますが、陽鑄されるものは外型を作る際に彫り込まれます。

また、千葉県浄土寺鐘などに見られるように、追刻される例も見られます。

これは、元々あった梵鐘の銘文を貞和5(1349)年に藤原末政が、現在の浄土寺鐘を鑄造した際に鐫刻したものです。そして、慶長7(1602)年に本来無銘であった第3・4区に、追刻で現在の浄土寺に移された由来が記されています。

1349年
南無阿弥陀佛
供養導士権律師善玄
執筆慶胤
權律師嚴胤
貫主慶明
平常秋
勸徳賢回
善寶
大巧藤原末政
貞和五年己十一月十五日
奉施入四尺鐘

1349年

2区

銘文

1254年
實福寺
奉施入四尺鐘
建長六年甲申三月十五日
大巧職上匠長
勸徳僧 隆圓
貫主 明幹

1254年

1区

旧鐘に記されていた銘文

1602年
山木
有女 正受庵 藤大夫
助言四人
木之内神五 石黒
且那
度也一開永不開之秘術
春花十惡盛凡夫爲濟
勸行滿沙界十念成就
者拾種功德擇去六時
寂滅爲樂谷舞也然鐘
法隆盛生滅、已秋月
諸行無常響者無常滅
余以來月氏騰且日城渡
團轉舍無常院始懸也自
人譽奥岩岩城者也雖皆
谷山法然上人門徒南蓮社
御代求之本願終南山道大
生國內府職家康日本仕慶王
淨土寺本尊御前奉掛三云
下鐘香取之郡大戸河
南無阿弥陀佛

1602年

4区

3区

追刻された銘文

浄土寺鐘の銘文

金井遺跡出土鑄型

武蔵北部の埼玉県坂戸市に所在する金井遺跡は、中世の鑄造遺構が多数確認されている遺跡です。高麗川が越辺川に合流する地点の南西、毛呂台地の北東先端に位置する遺跡です。

平成元～2年にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査により、小金銅仏を始めとする仏具製品や鍋や、犁先などの製品の鑄型のほか、梵鐘の鑄型が出土しています。

この梵鐘鑄型の特徴の一つとして撞座がありま

す。形状は複弁八葉蓮華文で、中房に1+8の蓮子を配し、中房の輪郭は単純な円形ではなく中心方向に切り込みの有る八花形でこの特徴は、鎌倉時代に相模国を中心として活躍した物部鑄物師の作品に見ることができます。

この他にも金井遺跡B区からは、物部鑄物師の作風に関連するものが多く出土しており、金井遺跡は物部鑄物師の武蔵における本拠地の可能性が考えられています。



第10群第7号鑄造土壌出土



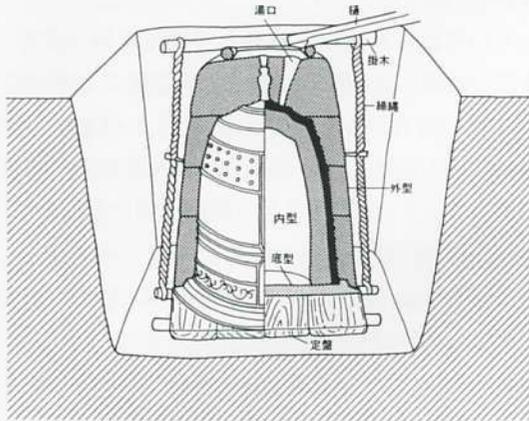
第5群第1号鑄込み跡・第1～3号鑄造土壌出土

中世の梵鐘鑄型—埼玉県坂戸市金井遺跡B区出土
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団提供

梵鐘鑄造構造

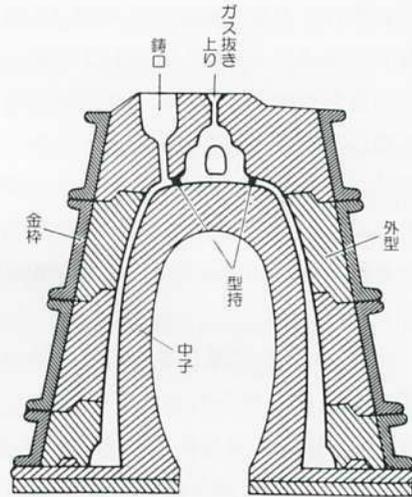
古代から梵鐘の鑄造が行われ、金井遺跡など全国各地で梵鐘鑄造遺構が発見されています。

梵鐘鑄造の方法は、地面に穴を掘りくぼめ、そこに鑄型を作成するか、または、穴を掘らずにそ



茨城県教育財団文化財調査報告第280集『島名熊の山遺跡』
(財)茨城県教育財団 平成19年3月より転載

のまま鑄型を作成し、溶かした青銅を流し込むようにします。梵鐘の鑄造遺構は全国で52例確認されています。



(香取正彦『鑄氏の春秋』
(日本経済新聞社 昭和62年11月)より一部改変転載)

梵鐘鑄造構造

遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構
1 真福寺遺跡	13世紀後半	大阪府南河内郡美原町黒山	銅鑄型・梵鐘鑄型・溶解炉	鑄造土坑
2 枚方田中家鑄物工場跡	江戸時代	大阪府枚方市枚方上之町	銅鑄型・梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
3 徳大寺遺跡	古代	大阪府箕面市生業台谷東・茨木市宿久庄	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
4 京都大学教養部構内AP22区	9～10世紀	京都市左京区吉田二本松町	梵鐘鑄型・銅鑄型・溶解炉	梵鐘鑄造土坑
5 京都大学医学部構内AN18区	13世紀前半	京都市左京区吉田近衛町	梵鐘鑄型	溶解炉
6 広隆寺	9世紀後半～10世紀初	京都市右京区太秦韓岡町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
7 丹波国分寺	9世紀	亀岡市国分	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
8 東大寺戒壇東地区	8世紀中葉	奈良市雑司町	大型鑄造土坑	
9 山田寺跡	鎌倉時代	奈良県桜井市山田	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
10 田中興寺跡	7世紀後半	奈良県橿原市田中町	梵鐘電頭鑄型	
11 巨勢寺跡	9～10世紀	奈良県御所市大字古瀬		鑄造土坑
12 飛鳥池遺跡	江戸時代	奈良県高市郡明日香村大字飛鳥池	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
13 川原寺寺城北垣	7世紀末	奈良県高市郡明日香村鉄羽釜鑄型	鉄羽釜鑄型	鑄造土坑
14 天蓋1号墳	中世	和歌山県有田郡吉備町勝並		梵鐘鑄造遺構
15 長尾遺跡	9世紀	滋賀県大津市滋賀町長尾	梵鐘鑄型・溶解炉	梵鐘鑄造土坑
16 坂本八条遺跡	平安後期	滋賀県大津市坂本本町		梵鐘鑄造遺跡
17 木瓜原遺跡	7世紀末～8世紀	滋賀県草津市野路町		梵鐘鑄造土坑
18 辻遺跡	18～19世紀	滋賀県東栗太市辻	梵鐘鑄型	溶解炉
19 多可寺跡	8世紀末	兵庫県多可郡中町御泊	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
20 白水遺跡	11世紀前半	兵庫県神戸市西區伊川谷町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
21 西安田・長野遺跡A地点	中世後期	兵庫県多可郡中町西安田・長野		梵鐘鑄造遺構
22 清水・タカアゼ遺跡	13～14世紀	兵庫県多可郡加美町清水		梵鐘鑄造遺構
23 鹿野宮ノ前遺跡	15世紀または17世紀前半	兵庫県西脇市鹿野町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
24 牧野・野西遺跡	13世紀	兵庫県多可郡中町		鑄造土坑
25 政所遺跡	平安後期	岡山市加茂	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
26 田村殿寺跡	奈良時代	香川県丸亀町田村町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
27 大浦遺跡	平安時代	徳島市市東町	梵鐘鑄型・密教器具鑄型	

遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構
28 上青鯉子～中佐古遺跡	16世紀前半	徳島県阿波郡市市場町上青鯉子	銅口鑄型	
29 前田遺跡	江戸時代	徳島県板野郡土成町土成字前田	梵鐘鑄型	
30 錦ノ浦遺跡	13世紀後半～14世紀前半	福岡県太宰府市錦ノ浦	各種鑄型	
31 浦嶋船跡	室町時代・11世紀	福岡県中央区城内		梵鐘鑄造土坑
32 小島遺跡	13世紀後半～14世紀前半	福岡県浮羽郡浮羽町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
33 智恵寺跡	鎌倉時代	大分県豊後高田市大字轟		梵鐘鑄造遺構
34 豊後国分寺跡	奈良時代			梵鐘鑄造土坑
35 大山廃寺跡	11世紀末	愛知県小牧市大山		梵鐘鑄造遺構
36 金屋遺跡	室町時代末	岐阜県恵那郡坂下町本郷	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
37 野口廃寺	古代	岐阜県各務原市		鑄造土坑
38 寺平遺跡	南北朝～室町時代	長野県上伊那郡飯島町本郷	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
39 龍尾廃寺跡	平安時代初期	福井県福井町	電頭鑄型	
40 豊原寺跡	14世紀後半～15世紀前半	福井県坂井郡丸岡町豊原		鑄造遺跡
41 一栗谷朝倉氏遺跡第64・65次調査	16世紀	福井県城戸ノ内町	梵鐘鑄型	
42 原山遺跡	江戸時代	新潟県糸魚川市大野	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
43 宮ヶ瀬遺跡群北原(No.9遺跡)	18世紀前半	神奈川県愛甲郡清川村大字宮ヶ瀬	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
44 関所跡遺跡	江戸時代	東京都国立市	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
45 下福国分寺跡	奈良時代	千葉県市川市	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
46 金井遺跡B区	13世紀	埼玉県坂戸市大字新堀字金井	鑄鑄型・銅鑄型	梵鐘鑄造土坑
47 金平遺跡	13世紀	埼玉県比企郡嵐山町金平	梵鐘鑄造土坑	
48 金谷遺跡	中世	茨城県稲川市金谷	銅鑄型・銅鑄型	鑄造関連土坑
49 島名熊の山遺跡	中世	茨城県つくば市島名	梵鐘鑄型・銅口・燈籠蓮華座	梵鐘鑄造土坑
50 川俣遺跡	19世紀	福島県伊達郡川俣町	銅鑄型・梵鐘鑄型	溶解炉
51 白山社遺跡	12世紀	岩手県平泉町	梵鐘鑄型	梵鐘鑄造土坑
52 堀沢山遺跡	12世紀	秋田県本荘市堀沢山	梵鐘鑄型・銅鑄型	鑄造土坑

梵鐘鑄造遺構出土遺跡一覧表

茨城県教育財団文化財調査報告第280集『島名熊の山遺跡』
(財)茨城県教育財団 平成19年3月より一部改変転載

4. 中世の鑄物師

鑄物師とは、鉄や銅の鑄造を専門とする職人のことをいいます。梵鐘は奈良時代から作られていますが、現存する奈良時代のものは16口、そのうち銘文があるものは僅かに4口です。そのうちの一つの京都府妙心寺の鐘に「戊戌年四月十三日壬寅収糟谷評造春米連廣國鑄鐘」と内側に陽鑄された銘文が認められ、戊戌（683）年の鑄物師が知られる最古の例です。その後11世紀頃まで梵鐘はほとんど作られず鑄物師の名も僅かに見られるばかりです。

12世紀になると梵鐘も多く造られ始め、鑄物師の名も銘文中に見られるようになります。12世紀から13世紀に造られた梵鐘は81口残っており、そのうちの62%が河内鑄物師の製品です。

河内鑄物師は、朝廷蔵人所から「燈籠作手」と称する特権が与えられていたことから全国的に広がっていったと考えられます。また、河内鑄物師のなかでも、丹治氏は各地に広がり多くの作品を残しています。

その他に、河内から出自して関東に移り住み、そこで活躍した鑄物師に物部氏・広階氏が挙げられます。鎌倉幕府が開かれ、建長4（1252）年の長谷の大仏建立のため多くの河内鑄物師が関東に移りました。丹治氏などは故地に戻りましたが、物部氏などは関東に定住しました。

このように中世に入って、鑄物師は全国的に広がり多くの作品を残しています。



源 景恒作（川越市喜多院所蔵）
正安2（1300）年／高さ114.0cm

丹治鋳物師と物部鋳物師

建長4(1252)年の長谷の大仏鋳造にともない河内鋳物師の丹治・物部・広階・大中原氏などが関東に赴き鎌倉大仏製作を行いました。

丹治氏は、この時代最も多くの梵鐘作品を残している鋳物師です。丹治(多治比・丹治比・丹)氏は、奈良時代より鋳物に関する家柄として知られており、梵鐘銘中に見られるのは大治四(1129)年奈良市中ノ川町成身院鐘に多治比頼友の名が見られます。その後江戸時代まで連綿として鋳物師として続いています。

最盛期は鎌倉時代で、11名の丹治氏の鋳物師名が確認されています。中でも丹治久友は、建長年中に造立された鎌倉市長谷の大仏鋳造の際に鎌倉へ下向して棟梁を勤めた人物です。久友の梵鐘作品は3口現存しており、奈良市東大寺真言院鐘、埼玉県川越市養寿院鐘、茨城県土浦市般若寺鐘があります。

丹治氏の本貫は河内ですが、一部は周防・備中・筑前でも活動しました。南北朝時代に入り河内鋳物師が続々と各地に移動するようになると、丹治氏も河内から摂津兵庫に移り江戸時代まで同地の鋳工として活躍しました。

同じく河内鋳物師で鎌倉大仏の鋳造で関東に赴いた鋳物師に物部氏があります。物部氏は、丹治氏のように大仏製作が終わるとともに河内に戻ることはなく、関東を本拠地として活動しました。

物部鋳物師は、鎌倉～南北朝時代にかけて武蔵と相模の両国の梵鐘をほとんど独占的に製作しています。鎌倉時代の物部姓鋳物師は9名を数え、中でも物部重光、物部国光が有名です。重光は、鎌倉市建長寺鐘や埼玉県比企郡慈光寺鐘などを製作しました。また、国光は最も多くの作品を残し、中でも最大で最優秀なものが鎌倉市円覚寺の洪鐘です。最大高260cmを測り、鎌倉時代では2番目の大きさの鐘です。

このように鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍した物部鋳物師ですが、室町時代以降その名が見られなくなります。しかし、物部鋳物師の作風は彼らの後継者として清原氏が、またその清原氏の後続鋳物師の本貫であった相模飯山(現厚木市)の鋳物師たちに受け継がれていきます。



丹治久友作(川越市養寿院所蔵)
文応元(1260)年/高さ97.0cm



物部秀重作(日高市聖天院所蔵)
文応2(1261)年/高さ81.2cm

広階鑄物師と大中臣鑄物師

丹治・物部氏とともに鎌倉時代に関東に赴いた鑄物師に広階氏と大中臣氏があります。

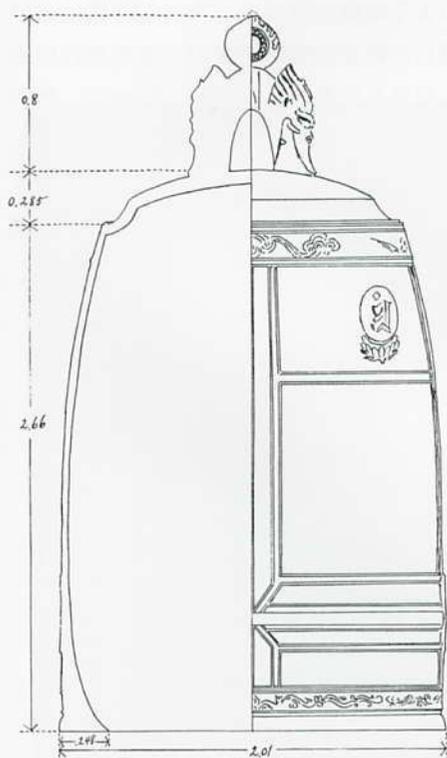
広階氏は、奈良県吉野山上千本の鐘樓に懸かる保延7（1141）年の鐘にその名が見られます。その後建久7（1196）年、相模大住郡極楽寺鐘に広階忠次の名が見られますが、この頃はまだ河内鑄物師として活躍しています。

広階氏も物部氏と同様に鎌倉市長谷の大仏製作が終わると、一部は河内に戻ったものの上総形部郡針谷郷（現千葉県長生郡長柄町）に移り住んでいます。この上総広階氏の作品は、千葉県長生郡長柄町眼蔵寺鐘の広階重永の作品のみが残ってい

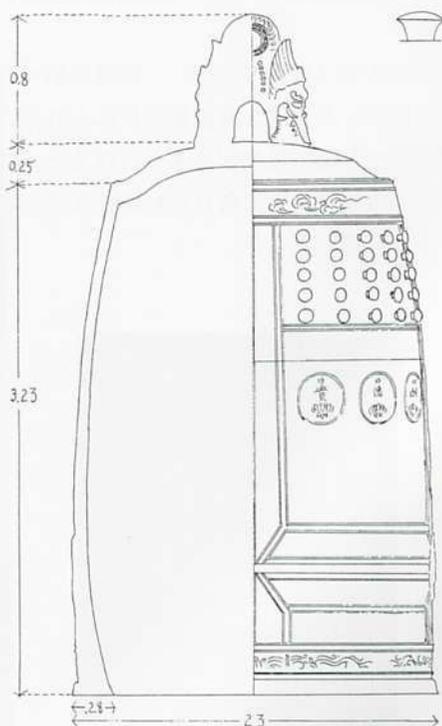
るだけです。広階氏は南北朝時代には不明となりますが、その後裔やその流れを酌んだものが御井庄箭田（現市原市矢田）、望陀郡矢名（現木更津市矢那）等の鑄工として残っています。

大中臣氏も同じく鎌倉市長谷の大仏の製作後、上総に移り住んだ鑄物師です。その作品は、千葉県松戸市本土寺にある鐘（元下総大福寺）のみが残っているだけです。

この梵鐘は、広階重永作の眼蔵寺鐘と似ている点、また銘文中に「上総国形部郡」と肩書きしていることなどから、広階氏と大中臣氏の親近な関係が指摘されています。



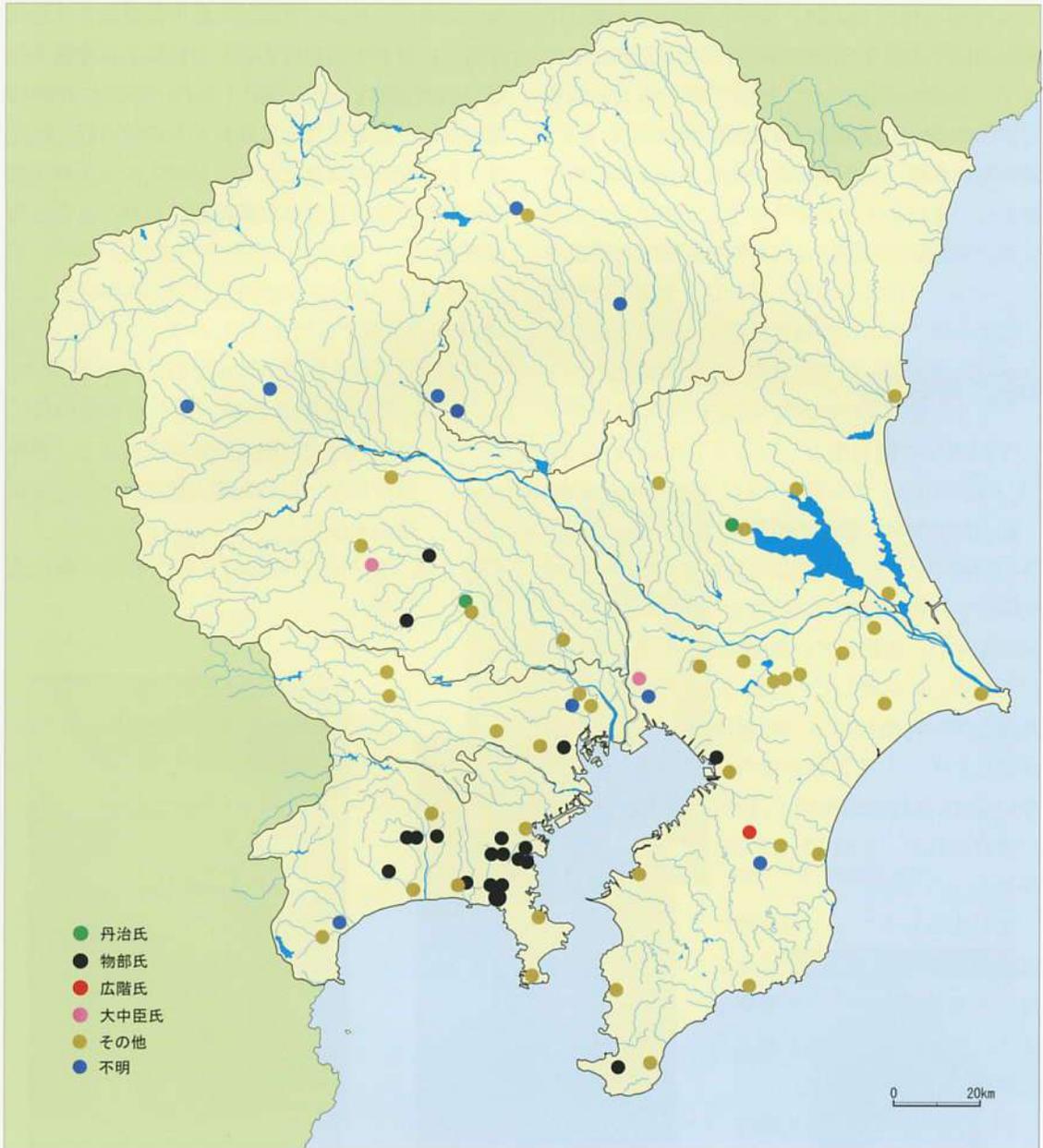
眼蔵寺鐘実測図



本土寺鐘実測図

（実測図は奈良国立文化財研究所編『梵鐘実測図集成』（上）（株式会社ビジネス教育出版社 平成5年3月）より転載）

関東における中世鑄物師の分布図



5. 近世の鋳物師

近世になると、鋳物業も統一された形になり、真継家はその統率をはかるようになります。

江戸開府後関東では、神田、横山、谷保、川越、川口、天明などで多くの鋳物師が活躍しています。香取秀真氏によると江戸で320人、京都で約130余人の鋳物師がいたと言われています。鋳物師たちは、江戸幕府開府後に各地から江戸に集まってきたことがわかります。

江戸時代に作られた鐘は2万7千口と推定さ

れています。これは太平洋戦争の際、金属回収令で供出された鐘が4万5千口(慶長末年以降の鐘)と推定され、このうち明治以降の鐘を除いたものから、2万7千口と考えられています。慶長末年以前の梵鐘は530余口ですから、いかに江戸時代になって激増したことがわかります。江戸時代は、経済発展の背景とともに梵鐘生産も多量生産が行われ、規格化された梵鐘が作られるようになります。

粉河鋳物師

今回新たに撫石庵コレクションを紹介した中で、「粉川市正」名の鐫刻された半鐘があります。

粉川鋳物師は、和歌山県粉河町に所在する粉河寺の門前で、江戸時代初期に鋳物生産を始めた鋳物師です。粉河鋳物師の特徴として、和歌山県粉河町を中心に活躍していた集団と、江戸に移住し江戸を中心に活躍していた集団、江戸と粉河町を往来していた集団の3つの集団が存在していたことがあげられています(『粉河鋳物師』(粉河町教育委員会 平成15(2003)年))。

撫石庵コレクションの半鐘に認められる粉川市正は、江戸に拠点を置き活躍していた鋳物師です。半鐘の銘文は以下のように鐫刻されています。

第1区「武州那珂郡古郡村／
日光山安光寺常什物／
翠岩置」

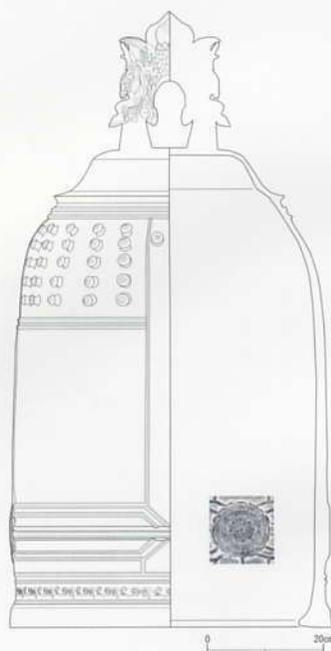
第2区「五樂堂道然居士／秀

延誠有信女／桐葉齋遊仙法道居士／轉舉
壽清信女／東秣齋鐵山道空居士／真雲齋
法山道榮居士」

第3区「施主江戸呉服町／谷口要助／粉川市
正作」



美里町安光寺鐘



美里町安光寺鐘
実測図

銘文にみられる「武州那珂郡古郡村」は、現在の埼玉県児玉郡美里町古郡の地で、日光山安光寺は現在も存続しており、ここには美里町文化財指定にされている寛延元（1748）年銘の梵鐘が一口懸けられています。この梵鐘には、安光寺の由来とともに梵鐘を造るにあたって喜捨した人達の名が刻まれ、最後に「干時寛延元辰冬至日／當寺中興第一代臨濟正宗三十五世翠岩手書／鑄工 江府神田住粉川市正 藤原宗次」と鑄刻されています。

このことから、撫石庵コレクションの半鐘にある「翠岩」は安光寺中興第一代住持で、「粉川市正」とは江戸神田に住した鑄物師であることがわかります。このことから、年代も恐らく寛延元（1748）年頃の同時期に作成されたものと考えられます。

香取秀眞著『江戸鑄師名譜』（1952年）によ

ると、「粉川市正藤原宗次」の名は、相模海老名海源寺鐘（元文二（1737）年）・横浜小松本法寺鐘（元文二（1737）年）・市ヶ谷長延寺鐘（元文五（1740）年）・岩手県平館大衆院鐘（寛保元（1741）年）・茨城高井高源寺鐘（延享四（1747）年）・武蔵美里安光寺（寛延元（1748）年）に認められます。美里町の鐘を除いて、いずれも戦時中に供出され現在見ることはできません。

江戸期の梵鐘はその多くが戦時中の金属回収令に伴い消失してしまっているため、残念ながらその詳細は不明です。

この他に粉河鑄物師として福島県で活躍した鑄物師もいます。これは「粉川松之助」といい、江戸に拠点を置いて出吹で福島において鑄物業をしていた鑄物師です。現在、この「粉川松之助」名の半鐘が福島県内に3例知られています。

粉河松之助鑄物師の作品



一圓寺半鐘（福島県福島市）



泉福寺半鐘（福島県川俣町）



玉泉寺半鐘（福島県川俣町）

関・加藤鋳物師

関・加藤鋳物師は、江戸時代に活躍した鋳物師です。関鋳物師は主に谷保村（現東京都国立市）を本貫に活躍していた鋳物師です。谷保では、矢澤・森久保・関の三家が中心となって鋳物業を行っており、江戸時代初期は矢澤家が主導的立場をとっており、その後三家が共同でとり行い、18世紀になると関家のみになっていくことが知られています。この三家は梵鐘鋳造などのときに協力して作業を行い、安定した梵鐘鋳造を行い、各地に供給していきました（『江戸近郊の鋳物師－谷保村関鋳物師の業績－』（くにたち郷土文化館

平成12（2000）年）。

加藤鋳物師は、現在の八王子市横川町を本貫とした鋳物師で、室町時代後半から江戸時代末頃まで活躍しました。江戸期の他の鋳物師と同じように日用品から仏具にいたるまで製作していますが、なかでも梵鐘は確認されているだけで80例が残っています。

この他にも、西村・堀・田中・小幡・大川・椎名・宇田川・長谷川など多くの鋳物師の名が残された製品の銘文中から確認されており、江戸の鋳物師の広がりがわかります。



加藤甚右白鐘／加藤与兵衛周慶作
（八王子市慈眼寺所蔵）
安永3（1774）年／高さ131.0cm



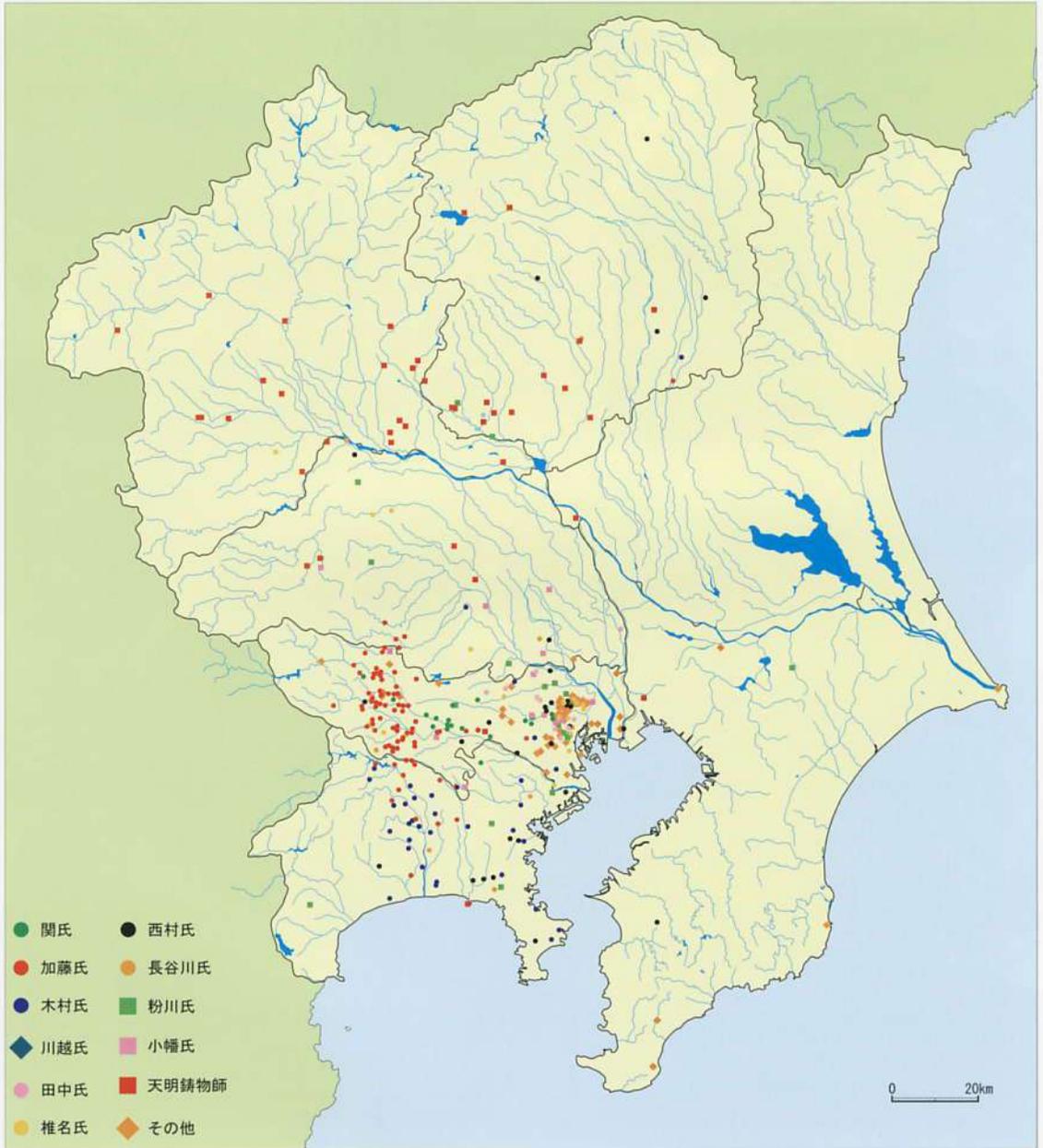
藤原氏関忠蔵種利作
（小平市円成院所蔵）
天保6（1835）年／高さ123.5cm



木村利左衛門尉為次 他作
（目黒区東光寺所蔵）
享保20（1735）年／高さ161.5cm

※関・加藤・木村鋳物師の梵鐘写真は和泉屋明江氏（立正大学文学部史学科卒）より提供して頂いた。

関東における近世鑄物師の分布図



講演会

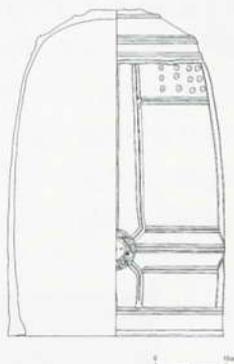
日時：平成20年6月15日（日）
時間：13時～15時30分
場所：立正大学熊谷校舎 2号館

講演1「撫石庵コレクションについて」

講師 眞鍋孝志氏（元日本古鐘研究会会長）

講演2「武蔵の梵鐘鋳物師」

講師 赤熊浩一氏（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）



伝櫃原市出土鐘（実物と復元実測図）

参考文献

- ・坪井良平『日本の梵鐘』（榊角川書店 昭和45年3月）
- ・埼玉県民俗工芸調査報告書第3集『埼玉の鍛冶』（埼玉県立民俗文化センター 昭和60年3月）
- ・倉吉市教育委員会編『倉吉の鋳物師』（倉吉市教育委員会 昭和61年5月）
- ・香取正彦『鋳師の春秋』（日本経済新聞社 昭和62年11月）
- ・坪井良平『梵鐘と考古学』（㈱ビジネス教育出版社 平成元年10月）
- ・奈良国立文化財研究所編『梵鐘実測図集成』（上・下）（㈱ビジネス教育出版社 平成5年3月）
- ・坪井良平『新訂 梵鐘と古文化』（㈱ビジネス教育出版社 平成5年10月）
- ・埼玉県埋蔵文化財調査報告書第146集『金井遺跡B区』（(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 平成6年10月）
- ・『天明鋳物里帰り展』（佐野市郷土博物館 平成10年10月）
- ・横浜市歴史博物館編『中世の梵鐘—物部鋳物師の系譜と鑄造—』（横浜市歴史博物館 平成12年1月）
- ・くにたち郷土文化館編『江戸近郊の鋳物師—谷保村関鋳物師の業績—』（くにたち郷土文化館 平成12年2月）
- ・国立市文化財調査報告 第43集『東京都国立市 関鋳物跡遺跡』（国立市教育委員会 平成12年2月）
- ・眞鍋孝志・花房健次郎『江戸東京梵鐘銘文集』（㈱ビジネス教育出版社 平成13年10月）
- ・眞鍋孝志『梵鐘遍歴』（㈱ビジネス教育出版社 平成14年4月）
- ・『天明鋳物師—天明その拡大と発展—』（佐野市郷土博物館 平成14年10月）
- ・『粉河鋳物』（粉河町教育委員会 平成15年12月）
- ・『古代の梵鐘』（独立行政法人奈良文化財研究所 平成16年10月）
- ・茨城県教育財団文化財調査報告書第260集『島名熊の山遺跡』（(財)茨城県教育財団 平成19年3月）

第5回企画展 梵鐘—撫石庵コレクションを中心に—

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成20年6月2日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL:048-536-6150/FAX:048-536-6170

E-mail:museum@ris.ac.jp

URL:<http://www.ris.ac.jp/museum/>